毒島誠が3冠、高塚清一に特別賞

令和6年の優秀選手が次の通り決定した。

▼最優秀選手　毒島　誠（初）
▼最優秀新人　藤原碧生（初）
▼最多賞金獲得選手　毒島　誠（初）
▼最高勝率選手　峰　竜太（9）
▼最多勝利選手　中辻崇人（初）
▼優秀女子選手　遠藤エミ（5）
▼記者大賞　毒島　誠（初）
▼特別賞　高塚清一（初）
　西島義則（初）

グランプリ初制覇の毒島誠がMVP、最多賞金、記者大賞の3冠に輝いた。意外とも思えるがいずれのタイトルも初。18、19年に2

高塚清一

毒島　誠

表1　現行制度の年間表彰選手

年号	西暦	MVP	最多賞金獲得	記者大賞	最高勝率	最多勝利	最優秀新人	女子MVP	特別賞
平8	1996	植木通彦②	植木　通彦	植木通彦②	植木　通彦	松田　雅文	石田　政吾	山川美由紀	野中和夫
平9	1997	服部幸男②	服部　幸男	服部幸男②	今村　豊⑤	村上　信二	原田　幸哉	大島　聖子	
平10	1998	松井　繁	松井　繁	松井　繁	今村　豊⑥	林　通	瓜生　正義	山川美由紀②	永滝芳行
平11	1999	松井　繁②	松井　繁②	今垣光太郎	植木通彦②	桂林　寛	平尾　崇典	山川美由紀③	
平12	2000	西島　義則	市川　哲也	西島　義則	植木通彦③	市川　哲也	平田　忠則	寺田　千恵	
平13	2001	田中信一郎	田中信一郎	市川　哲也	今村　豊⑦	大島　聖子	田村　隆信	寺田千恵②	市川哲也
平14	2002	植木通彦③	植木通彦②	植木通彦③	今垣光太郎	松野　京吾	中島　孝平	角　ひとみ	加藤峻二②
平15	2003	田中信一郎②	田中信一郎②	田中信一郎	山崎　智也	坪井　康晴	吉田　俊彦	日高　逸子	松井繁
平16	2004	今村　豊③	今村　豊	今村　豊⑤	今村　豊⑧	木村　光宏	吉永　則雄	海野ゆかり	
平17	2005	辻　栄蔵	辻　栄蔵	辻　栄蔵	松井　繁	湯川　浩司	石野　貴之	日高逸子②	
平18	2006	松井　繁③	松井　繁③	松井　繁②	松井　繁②	徳増　秀樹	峰　竜太	横西　奏恵	山崎智也
平19	2007	魚谷　智之	魚谷　智之	魚谷　智之	服部　幸男	木村光宏②	岡崎　恭裕	寺田千恵③	湯川浩司
平20	2008	松井　繁④	松井　繁④	井口　佳典	吉川　元浩	岡本　慎治	篠崎　元志	横西奏恵②	
平21	2009	松井　繁⑤	松井　繁⑤	松井　繁③	今垣光太郎②	大嶋　一也	平山　智加	浜村美鹿子	池田浩二、加藤峻二③
平22	2010	中島　孝平	中島　孝平	中島　孝平	魚谷　智之	勝野　竜司	平高　奈菜	日高逸子③	
平23	2011	池田　浩二	池田　浩二	池田　浩二	瓜生　正義	瓜生　正義	山田　康二	田口　節子	
平24	2012	山崎　智也	山崎　智也	山崎　智也	白井　英治	深川　真二		三浦　永理	井口佳典、田口節子
平25	2013	池田浩二②	池田浩二②	池田浩二②	瓜生正義②	守田　俊介	岩瀬　裕亮	平山　智加	
平26	2014	菊地　孝平	菊地　孝平	菊地　孝平	瓜生正義③	田頭　実	江崎　一雄	日高逸子④	
平27	2015	山崎智也②	山崎智也②	山崎智也②	峰　竜太	峰　竜太	村上　遼	寺田千恵④	
平28	2016	瓜生　正義	瓜生　正義	瓜生　正義	峰　竜太②	渡辺　浩司	山田　祐也	松本　晶恵	石野貴之
平29	2017	桐生　順平	桐生　順平	桐生　順平	峰　竜太③	吉川　昭男	羽野　直也	遠藤　エミ	石野貴之②、長嶋万記
平30	2018	峰　竜太	峰　竜太	峰　竜太	峰　竜太④	田頭　実②	大山　千広	小野　生奈	毒島誠、松本晶恵
令元	2019	石野　貴之	石野　貴之	石野　貴之	峰　竜太⑤	篠崎　元志	宮之原輝紀	大山　千広	吉川元浩、毒島誠②
令2	2020	峰　竜太②	峰　竜太②	峰　竜太②	峰　竜太⑥	峰　竜太②	前田　篤哉	平高　奈菜	今村豊
令3	2021	瓜生正義②	瓜生正義②	瓜生正義②	峰　竜太⑦	石川　真二	畑田　汰一	遠藤エミ②	
令4	2022	馬場　貴也	白井　英治	遠藤　エミ	池田　浩二	新開　航	末永　和也	遠藤エミ③	遠藤エミ
令5	2023	石野貴之②	石野貴之②	石野貴之②	峰　竜太⑧	白井　英治	大澤　風葵	遠藤エミ④	
令6	2024	毒島　誠	毒島　誠	毒島　誠	峰　竜太⑨	中辻　崇人	藤原　碧生	遠藤エミ⑤	高塚清一、西島義則

丸数字＝獲得回数　　＝複数タイトル獲得

年連続で特別賞に選出されて以来、5年ぶりの晴れ舞台でもある。

最優秀新人は文句なしの成績を残した藤原碧生。岡山支部からは99年の平尾崇典以来、2人目の選出。最高勝率は2年連続9回目の峰竜太。まともに走れば勝率で峰にかなう選手はなかなか出てこない。最多勝利は一般戦で無双した中辻崇人。F2があり実働9か月での120勝で、福岡支部では田頭実の2回を含め10人目の快挙だが、最近11年間に限っても7人目。近年は一般戦の鬼が多い福岡支部がほぼ独占状態だ。

女子MVPの遠藤エミは4年連続で5回目。獲得賞金も2回目の8千万円台に乗せて4年連続の賞金女王でもある。

特別賞には高塚清一と西島義則が選出された。高塚は業界初となる喜寿（77歳）を迎えた現役最高齢選手で、最年長1着記録を更新し続けている。前期は1971年前期以来、実に53年ぶり3回目のF2という試練もあったが、1月20日の平和島から元気に復帰。西島は史上5人目となる3000勝や通算2連対5000回という記録を達成した。

なお、表彰式典は2月17日に開催される予定。

表2　2000年以降の賞金女王

年	選手名	獲得賞金
2000	寺田　千恵	56,606,000
2001	寺田千恵②	67,215,000
2002	角　ひとみ	43,093,000
2003	日高　逸子	42,444,000
2004	海野ゆかり	48,891,133
2005	日高逸子②	57,184,100
2006	横西　奏恵	50,807,000
2007	寺田千恵③	36,690,000
2008	横西奏恵②	46,391,000
2009	濱村美鹿子	31,056,600
2010	日高逸子③	36,550,000
2011	田口　節子	36,827,808
2012	田口節子②	41,897,000
2013	平山　智加	52,674,000
2014	日高逸子④	40,965,000
2015	寺田千恵④	40,522,000
2016	松本　晶恵	44,936,000
2017	遠藤　エミ	53,904,500
2018	小野　生奈	41,907,532
2019	大山　千広	56,836,000
2020	平高　奈菜	54,912,000
2021	遠藤エミ②	64,398,000
2022	遠藤エミ③	82,668,200
2023	遠藤エミ④	59,374,000
2024	遠藤エミ⑤	80,571,000

表3　女子歴代獲得賞金ベスト18

順	選手名	獲得賞金	年次
1	遠藤　エミ	82,668,200	2022年
2	遠藤　エミ	80,571,000	2024年
3	寺田　千恵	67,215,000	2001年
4	遠藤　エミ	64,398,000	2021年
5	遠藤　エミ	59,374,000	2023年
6	日高　逸子	57,184,100	2005年
7	三浦　永理	57,106,000	2024年
8	大山　千広	56,836,000	2019年
9	寺田　千恵	56,606,000	2000年
10	田口　節子	54,941,266	2022年
11	平高　奈菜	54,912,000	2020年
12	平高　奈菜	54,641,000	2022年
13	遠藤　エミ	53,904,500	2017年
14	守屋　美穂	53,501,000	2023年
15	平山　智加	52,674,000	2013年
16	浜田亜理沙	52,609,000	2023年
17	山川美由紀	51,267,555	1993年
18	横西　奏恵	50,807,000	2006年

記念戦線復帰の菅章哉がいきなり優出

23年9月の唐津周年優勝戦でFを切り、罰則規定により1年間のGⅠGⅡ出場停止処分を受けていた菅章哉。昨年は5月の多摩川オールスター以外は全て一般戦を走りV9と意地を見せ、今年もさっそく鳴門正月レースを3カドまくりで優勝と好調をキープ。

待ちに待ったGⅠ復帰戦は1月11日からの下関周年。初日のドリーム戦にも抜てきされて4日目には連勝ゴールを飾って予選を2位で通過。準優は3着と敗れたものの、2着の佐藤翼が不良航法を取られ繰り上がり優出。優勝戦は6号艇になったことで迷いなしのチルト3度で挑み、もう少しでインの宮地元輝を沈めるところまで追い詰めての3着。続く常滑BBCトーナメントでも1回戦で4カドまくりを決めるなど見せ場はたっぷり。堀之内紀代子や藤山翔大ら一時は勢いがすごかった伸びペラ軍団の勢いが止まる中、菅だけは変わらぬ超抜伸びを披露し続けている。

なお、菅の活躍で盛り上がった下関周年の節間の売り上げは126億4702万8100円。それまでの記録だった23年1月の若松70周年の約120億円を抜いて新記録を樹立するほどだった。

中田竜太、浜田亜理沙優勝戦夫婦対決

1月8日の戸田正月レース優勝戦で中田竜太、浜田亜理沙の夫婦対決が実現した。準優1着だった浜田は2号艇。中田は準優2着ながら1着の飛田江己が待機行動違反で優出除外になったことで3号艇での登場。夫婦ワンツーなるかが期待されたが、1号艇には桐生順平。この壁は厚く浜田が2着、中田は4着に敗れた。

これまで夫婦レーサーによる優

勝戦での直接対決は福田雅一、平山智加夫婦のみ。11年と13年に2回、地元の丸亀で激突していた。11年のお盆レースでは平山が3着、福田が5着。13年のGWレースでは福田が4着、平山が5着で、こちらも夫婦ワンツーは達成していないが11年のお盆レース準優は福田が4コースまくりで1着、平山がインから残して2着の夫婦ワンツーだった。

大庭元明スタート無事故3000走

1月2日の若松正月レース3日目8Rで、大庭元明が史上31人目（加藤峻二が2回）となるスタート無事故3000走を達成した。福岡支部では坂本勝美、塩田北斗に続く3人目。

大庭が最後にFを切ったのは14年4月4日の福岡。それから10年9か月間スタート無事故を続けているが、この間にはスタート事故だけではなく、転覆なども一切ない1025走完全無事故もマーク。大庭はスタート無事故3000走と完全無事故1000走以上を史上初めて達成した選手になった。

なお、現役では栗原謙治が近いうちに、村岡賢と橋口真樹は来年にもスタート無事故3000走に到達しそう。

逆に13年12月21日の浜名湖でのFを最後にスタート無事故を続けていた大谷直弘は1月22日の尼崎11Rで11年1か月ぶりのFを切ってしまい、スタート無事故記録は3100走でストップした。

（※表内の黄色表示は現在も記録続行中の選手）

表4　スタート無事故3000走達成者

順	選手名	記録	順	選手名	記録
1	河合　三弘	5959	17	岸　正明	3404
2	森　實	5782	18	及川　恵三	3350
3	小野　勇作	5412	19	吉岡　修	3349
4	林　侃	5308	20	森　洋	3297
5	佐藤　政行	5146	21	田嶋　茂	3280
6	藤田　竜弘	4951	22	小澤　学	3230
7	信濃　由行	4837	23	吉村　重行	3199
8	水長　照雄	3993	24	坂本　勝美	3165
9	加藤　峻二	3937	25	深井　利寿	3123
10	加藤　峻二	3797	26	白井　弘文	3114
11	増田　弘喜	3779	27	大谷　直弘	3100
12	米田　隆弘	3585	28	加藤　知弘	3061
13	金子　貴志	3556	29	村上　一行	3034
14	都築　正治	3477	30	山本　富男	3019
15	塩田　北斗	3454	31	大庭　元明	3016
16	浦田　典裕	3410			

2025年1月24日現在

関東のSG覇者3人が2000勝

12月末から1月にかけてSGタイトルを持つ関東のベテラン3人、滝沢芳行、中澤和志、高橋勲が2000勝を達成した。高橋が史上185人目。

滝沢芳行は12月28日の宮島一般戦8R。内訳はSG29勝、GⅠ187勝、GⅡ2勝、GⅢ149勝、一般戦1633勝。埼玉支部では9人目、63期では今垣光太郎に続く2人目。88年11月のデビューから36年1か月、7582走目での達成。滝沢は01年常滑ダービーのSGタイトルを持つ。

中澤和志は1月4日の地元戸田5R。内訳はSG45勝、GⅠ189勝、GⅡ23勝、GⅢ165勝、一般戦1578勝。埼玉支部では10人目、82期では赤岩善生に続く2人目。98年5月のデビューから26年8か月、6346走目での達成。中澤は06年平和島クラシックでSG初制覇。GⅠも4勝している。

高橋勲は1月6日の江戸川6R。内訳はSG55勝、GⅠ221勝、GⅡ8勝、GⅢ177勝、一般戦1539勝。東京支部では11人目、68期では山一鉄也に続く2人目。91年5月のデビューから33年8か月、6720走目での達成。高橋は07年平和島ダービーのSGタイトルを持つ。

2024年次売り上げ

2024年（令和6年）の1月から12月までの売り上げが発表された。

総売り上げは2兆5215億4087万4000円で、前年比5・3%の増加。総利用者も3・2%増の4億6955万1255人となった。

場別では1926億2055万7300円の大村がトップで、住之江、丸亀、蒲郡とナイター場が続く。

倉谷和信、白石健らが引退

12月末から1月にかけて次の10選手が引退した。

倉谷　和信（大阪61歳60期）
白石　健（兵庫47歳80期）
垣内　清美（三重58歳59期）
一色　雅昭（愛知58歳69期）
坂本　徳克（東京54歳70期）
マイケル田代（東京39歳113期）
船越　健吾（香川32歳119期）
檀　将太（福岡29歳116期）
粟田　祥（徳島29歳122期）
池田　なな（大阪24歳127期）

倉谷和信さんは上瀧和則元会長や烏野賢太らと同期で87年5月にデビュー。野中和夫さんの最後の弟子になり、3期目にはA級に昇格。95年後期から21年前期まで

倉谷和信

52期連続でA1級をキープし続けた。自己最高勝率は00年後期の7・98。

SG出場は83回。初優出だった96年児島オールスターでは3号艇からピット離れでインを奪取し、優勝を目前にしながら2マークでまさかの転覆。通算9回の優出があったが、ついにタイトルには手が届かなかった。GIは34回の優出で4回の優勝。通算成績は786走で勝率6・92、2205勝、優出293回、優勝57回。生涯獲得賞金は約13億4317万円で歴代57位。現役最後のレースは12月12日の地元住之江。まな娘の関野文とはついに直接対決がないままの引退となった。

白石健さんは白井英治らと同期で97年5月にデビュー。3期目にはA2級、6期目にはA1級に昇格、出走回数不足の期以外はずっとA1級をキープしていた。自己最高勝率は03年前期の8・19。SG出場は14回で優出なし。GIは8回の優出があったがついに優勝には届かなかった。通算成績は5484走で勝率7・00、1957勝、優出262回、優勝79回。20年12月には若松で24場制覇も達成している。生涯獲得賞金は約6億9433万円。22年8月28日の唐津を最後に長期欠場。昨年10月25日の津で2年2か月ぶりに実戦復帰したものの、1走しただけで帰郷。そのまま引退となった。

白石健

垣内清美さんは艇王・植木通彦さんらと同期の59期で86年11月にデビュー。8期目からA級常連に定着し、A1級には6期昇格。自己最高勝率は10年後期の6・80。レディースチャンピオンには第4回大会が初出場で17年までに30回ほど出場。第5回から第7回にかけて3連続優出も記録。GIは東海ダービーやマスターズチャンピオンにも出場経験がある。通算成績は7245走で勝率5・48、1382勝、優出129回、優勝16回。生涯獲得賞金は約5億9630万円。現役最後のレースは11月23日の蒲郡。

一色雅昭さんは68期だったが大けがで卒業が遅れ田中信一郎らと同期になり91年11月にデビュー。8期目からA級常連になりA1級昇格は12期ある。自己最高勝率は02年後期の7・07。SG出場はなく、GIは2回の優出はあったが優勝なし。通算成績は6739走で1145勝、優出111回、優勝14回。生涯獲得賞金は約5億7281万円。現役最後のレースは1月4日の地元常滑。一色さんは大阪の強豪だった一色肇さんのおいっ子で、息子2人（凌雅、颯輝）も後を追って選手になっている。

坂本徳克さんは濱野谷憲吾らと同期で92年5月にデビュー。A2級昇格が3期あり自己最高勝率は98年後期の5・55。優出は13回で唯一の優勝は04年2月の大村。通算では5352走で485勝。現役最後のレースは12月25日の戸田。息子の一真は132期でデビューし、親子対決は2回。どちらも父が先着している。

マイケル田代さんは椎名豊らと同期で13年11月にデビュー。A級昇格はなかったが優出は2回。通算1666走で116勝。現役最後のレースは12月26日の桐生。

船越健吾さんは井上忠政らと同期で16年11月にデビュー。A級昇格はなかったが23年7月の住之江で唯一の優出がある。通算では1361走で78勝。現役最後のレースは1月9日の尼崎。

檀将太さんは大山千広らと同期で15年5月にデビュー。通算718走で25勝。現役最後のレースは12月29日の大村。

粟田祥さんは畑田汰一らと同期で18年5月にデビューし実働は6年半。通算885走で48勝。24年5月に下関で唯一の優出（4着）があった。現役最後のレースは12月14日の徳山。

池田ななさんは仲道大輔らと同期で20年11月にデビュー。1年間の欠場などもあり実働は3年。通算293走で3勝。現役最後のレースは10月12日の地元住之江。

選手の負傷情報

魚谷香織＝12月13日下関オールレディース最終日5Rで3番手を航走中だった2周2マークで失速し、後続艇が接触して転覆。右大腿（だいたい）骨外顆骨折と頸椎（けいつい）ねん挫で全治見込みは3か月。

吉村正明＝12月19日芦屋一般戦優勝戦12Rの1周1マーク、まくりが決まりかけていたところにインから流れてきた選手と接触して落水し、後続艇と接触。右尺骨近位端骨折、右橈骨頭脱臼、右膝開放創で全治見込みは未定。

村岡　賢＝12月26日丸亀一般戦

6日目4Rの1周2マークで転覆（妨害）したところを後続艇が避け切れずに接触。右下腿挫滅創、右前脛骨筋断裂で全治見込みは約2か月。

松尾宣邦＝12月31日若松正月戦初日7Rの2周1マークのターン出口で失速したところに後続艇が接触。左側胸部打撲、左肋骨骨折で全治見込みは未定。

中岡健人＝1月1日丸亀正月戦3日目2Rの1周2マークで後続艇と接触して落水し、さらに後続艇が接触。左下肢開放骨折で全治見込みは未定。

木山誠一＝1月10日児島での支部訓練中に転覆。右尺骨骨幹部骨折で全治見込みは未定。

川島拓郎＝1月22日びわこ一般戦初日7Rの1周バックストレッチ直線で先行艇と接触して転覆。左肘骨折、左下肢打撲で全治見込みは約2か月。

今月の水神祭

（初勝利）
12月23日　石井　伸長（香川134期）
12月29日　根岸　真優（埼玉133期）
12月31日　横田　海人（愛知132期）
（GⅠ初勝利）
1月12日　島川　海輝（山口126期）
（初優勝）
12月28日　佐々木翔斗（大阪118期）
12月31日　松本　純平（埼玉123期）
1月3日　幸野　史明（福岡99期）
1月14日　岩永　雅人（愛知107期）
1月20日　横田　貴満（佐賀119期）

初優勝は5人。11回目の優出だった佐々木翔斗は三国でイン速攻。新開航らの118期では10人目の優勝者になった。早大生だった時に本誌でアルバイトをしていた松本純平は21回目の優出だった平和島でインから逃げて悲願達成。前田滉らの123期では6人目の優勝者。

幸野史明は地元強豪がそろう芦屋正月レースで5コースから見事なまくり差しを決め、池永太、新開航らを撃破しての大金星。初優出が23年7月の多摩川。デビューから18年2か月の2回目の優出で初優勝を手にした。茅原悠紀らの99期では17人目の優勝者。

岩永雅人もデビューから14年2か月、12回目の優出だった戸田で初優勝。これが3回目の優勝戦1号艇だったが、正月レースで佐藤航が仕上げた超抜エンジンを生かしてインから逃げた。近江翔吾らの107期では12人目の優勝者。

12回目の優出だった横田貴満は丸亀でイン逃げ。こちらは2回目の優勝戦1号艇を生かし切った。井上忠政らの119期では13人目の優勝者。

初勝利の水神祭は3人だけ。児島で5コースから差し勝ちの石井伸長は2期目に入った134期では6人目。地元の戸田で4コースからまくり勝ちの根岸真優は133期では18人目で、残るは8人になった。横田海人は平和島で4コースまくりを決め、132期の未勝利選手は4人まで減った。

島川海輝は2回目のGⅠ出場だった地元下関周年で2号艇からインを奪取して逃げ切り勝ち。2月には徳山の中国地区選にも出場する。

佐々木翔斗

松本純平

島川海輝

幸野史明